# 仏さまのお弟子になる

―帰敬式を受けて始まる歩み―

藤井　善隆

東本願寺出版
伝道ブックス 79

# 仏さまのお弟子になる

## ―帰敬式（ききょうしき）を受けて始まる歩み―

藤井　善隆

# 目次

■仏さまのお弟子になる……1
■人身受け難し……6
■仏さまとの深い縁……12
■仏さまの願い……15
■迷っている私たち……18
■命の私有化……22
■六道という迷いの世界……24
■生死の苦……29
■仏さまの教えを聞く身になるということ……30
■人生を支えるもの……32
■「如来」とは……35
■どうにもならない身を抱えて……37
■業縁存在の身……39
■帰敬式を受けるということ……44
■迷いの身に気づく……48

【凡例】

本文中の真宗聖典とは、東本願寺出版（真宗大谷派宗務所出版部）発行の『真宗聖典』を指します。

## ■仏さまのお弟子になる

私たちが帰敬式を受けるということは、法名をいただき、仏さまのお弟子になる。そして、真宗のみ教えを聞かせていただいて、仏・法・僧の三宝に帰依するということです。しかし、三宝に帰依するとは、私たちが生きる上で一体どういう意味をもつのかということがはっきりしなければ、そこから仏弟子としての次の歩みが始まらないのではないかと思います。

そこで、あらためて帰敬式を受けさせていただくことの意義と、そしてそこから仏法を聞く身として歩むとはどういうことなのかを、ご一緒に確かめてまいりたいと思います。

さて、帰敬式を受ける時には、必ず「三帰依文」を唱えます。お寺の法要などでも、ご法話の前に読まれることが多いので、みなさんも聞かれたことがあると思います。

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。
この身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてかこの身を度せん。大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。
自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意を発さん。
自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く経蔵に入りて、智慧海のごとくならん。



自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して、一切無碍ならん。
無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し受持することを得たり。願わくは如来の真実義を解したてまつらん。

この「三帰依文」の最初の言葉に、「人身受け難し」とあります。その意味は、「人間の身に生まれさせていただくということは、それはそれは受け難い、ありえない」ということです。ありえないことなのですが、不思議にも我々は命をいただき、人間の身に生まれ、こうしてただいまを生かさせていただいている。そのことをよくよく考えましたら、ただ事ではないと思うのです。決して当たり前ではございません。まずはそ

のことに感動する、驚きをもつということが大切ではないかと思います。そういう感動があって初めて、この人生を本当に大事に生きていきたいという願いが私たちに生まれるのでしょう。そして同時に、人生を大事に生きていくということは、一体どう生きることなんだろうという問いが起こってきます。つまり、道を求める、仏法を聞くという次の歩みが始まるのではないかと思うのです。

ところがどうしたことか、我々はこうして生まれてしまえば、いつしか人間に生まれたことが当たり前になってしまっているのではないでしょうか。たまたま、偶然に生まれてきたのであって、頼みもしないのに親が勝手に産んだ。だから、別に生きていても何の意味もない、と。

そうして生きていること自体に驚きや喜びを見いだせないということ



になりますと、何かいいことはないか、楽しいことはないか、儲(もう)かることはないかと、ひたすら自分の「外」に何かを求めていくような生き方になります。ただいい目にあいたい、思いどおりになりたい、そういうことで一生生きましても、ほんとうに心の底から喜べることはないのでしょう。ちょっとは楽しいこともあるかもしれませんが、やがては必ずあっという間に年を取り、病気をし、消え去っていかねばなりません。それでは、あまりにもはかない、むなしい存在と言わねばならないのではないでしょうか。生きているということに、何の意味も見いだせないということが、人間にとって一番傷(いた)ましいことなのではないでしょうか。

人間に生まれ、こうして生きていますと、いろんな苦しいこと、悲しいこと、不幸なことに出あっていかねばなりません。確かにそういうこ